

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

# 魔が堕ちる 土夜2

デーモニックスレイブ

小説 譚 堂

挿絵 笹 弘

第一章

コロシウム&オークション

006

第二章

魔姫調教

088

第三章

受胎蜜戯

126

第四章

影に汚辱を満たす者

222

## 登場人物紹介

Characters



### シェリスエルネス・ザーバツハ

魔王ザーバツハの、十人の子の一人。勝ち気で執念深く、受けた恨みはきっちり百倍にして返す主義。臣下の仇を討とうとギルバを追ったが、返り討ちに遭い虜囚の身に。

### きどあね 木戸茜

退魔師の少女。直情径行でケンカっ早い。訳あってシェリスの下僕にさせられた。

### ギルバ

魔神。かつての権勢を取り戻すため、シェリスの力を利用しようと企む。

### メデューナ

ギルバの部下であり眷属。卓越した技量の水術使い。芸人気質の楽道家。

### ミーティ

ギルバの部下であり眷属。クモ糸を自在に操る。常に冷静沈着な策士。

よい悦楽に変えていく。黒カップの内側で両房から突出していく赤乳首は墮落の兆しであった。

(やだ……やだあ……つつ)

触手のベッドに捕らわれたシエリスが腰を振っていると、イソギンチャクを細長く伸ばしたような触手が、黒革のドレスの腹部に入った大きな切れ込みから侵入してきた。口周りの触手で臍を舐め回してくるので、身を揺すって振り払ってやろうとした瞬間、今度は腰下にザラリとした感触を覚える。舌状の物体がペチコートを捲って眩しい白腿にむしゃぶりついてきたのだ。下着の肉盛りと脚の付け根の間、肉溝を先端で丹念になぞられると、恥ずかしさと奇妙な所を刺激される妖しい興奮が込み上げる。そろそろ血液を吸い込んで緩み始めている陰唇が、何かをねだって透明な液体を吐き出した。じわじわと秘部の温度が上昇していく。

「んぶうう——、んむううううう——っ！」

触手の海と接吻するシエリスは、淫らな感覚を次々と開花させられていくことに恐れと焦燥感を覚えた。形のよい頭を震わせながら、口腔の蟲を噛んで抵抗するのだが、むしろ獲物の反抗を喜ぶかのように触手は蠢く。今度は人の頭ほどもある肉製の猫じゃらしが、ヌイッとシエリスの股の間に押しつけられた。

「ひむっ？」

穂先に生え揃った無数の肉手の先端が、乙女の柔丘をクニクニと突つついた。小人たちに触られるようなもどかしさを覚えたのも一瞬のこと、次の瞬間にはランスを揃えた騎兵団の如く、力強く陰唇の盛り上がり搔き寄ってくる。薄桃色のシヨーツに透けて見える、肉色のお玉杓子の体表であるかのように粘液でヌルヌルにされた陰唇。それを、重量感のある肉じゃらしの大量の毛並みでざわざわと撫で上げられた。よじれた峰が、愛液を吐き出す。アロエの葉の如く厚ぼったくなってきた肉ピラを刺激されると、腰が跳ねてしまうようなビリビリとした電撃を感じる。

反射的に腿を固く閉じてしまったら、内腿まで盛んに肉毛で責めてきた。先端が力強く柔らかい腿肉に食い込む。甘美な快感が腰から湧き上がる。

幾本もの肉じゃらしがシェリスの肌に触れた。敏感な硬い羽の根元を、肉のタワシでゴシゴシ擦り立てられる。羽の間で粘液が白く泡立つと、胸が締めつけられるようなせつなさに襲われた。くねる悪魔尻尾を数本で挟み込んでブラッシングされると、全身を扱かれるような気分になってしまう。

「くむうう、んうっ……ふぁっ……あむううううううっ！」

司会者が羞恥を煽ってくる。

『あの愛液を滲ませて振り立てられる腰を御覧ください！肉じゃらしに身悶え尻尾をくねらせる様はまさに子猫、しかし、先ほどの抵抗を御覧になりました通り、平気で人に爪

を立てる獐猛な野良猫でもございます。被虐の極みにありますかの紫髪の少女、復讐と刑罰の魔王ザーバツハの七番目の子にして、常夜の荒野を治める麗しき魔城の主！腕に覚えのあるどなたか、女城主を従順な犬に馴てみたくはございませんかあつ？」

薄暗い客席が活気づいていく。会場から「自分はこの獲物にいくら出そうか」という値踏み視線が降り注ぎ、肌を恥辱のサンオイルを塗ってくる。無慈悲で眩いスポットライトが、少女の心を被虐的な陶醉感で焼き焦がしていく。肉じゃらしの上ですつかり張り詰めたヒップがせつなそうに震え、人の視線を感じるたびに尻たぶをひくつかせた。

七日間熟成された少女の官能は、被虐感に火をつけられて否応なしに昂ぶっていく。小波のような快楽が肉体の中でぶつかり合い、愉悅に化けた。ショーツの繊維からジワジワと染み出る愛液が、肉じゃらしに擦られて白く泡立つ。

（みないでっ、さわらないで、私をおかしくしないでええっつ！）

身体に塗される粘液が潤滑油となり、皮膚と触手が小気味よく擦れ合う。ピリピリとした刺激と痒い所を搔かれるような陶醉が、少女の肌に快感を染み込ませて蕩かしていく。反った胴体を丹念にヒトデ触手が撫で擦る。口の中で、舌全体を引き抜くようにしてざらりと舐め上げられ、目が眩むほどゾクリと背筋が震えた。

身体のどこもかしこもが、触手たちに蹂躪されている。乳房にお尻、女を匂わせる部分はずべて、牝肉への執念を漲らせた肉紐たちに罅られているのだ。



体液塗れの全身をヌルリズチヨリと扱かれると、まるで巨人の掌の中で弄ばれているような錯覚を覚える。抵抗して身を振れば振るほど、肌が擦れて肉体が蕩けていく。おもらしをしてしまいそうな甘美な快感が肉体を貫いていく。

——ゴシ、ゴシゴシ……ズチュル、ズニウルウウ……ゴシ……。

「んう……ふむううううううっつ！」

気泡を抱えた溶岩の如く醜悪に盛り上がった触手床に撚られる。毎日手入れをして宝石のように磨き上げてきた肌を、この世に醜さで並ぶものがないと思える連中に辱められる屈辱感。そんな奴らの手による快楽に溺れそうになっている自分への、自虐に満ちた陶醉。——それらが小さく弾けた。

「んっ、んううううううっつ！ んびうううううううっつ！ ふびううううううううううっつ！」

一度シエリスの腰が跳ねた。悪魔尻尾が、天井目がけて真っ直ぐに立てられる。

首輪の内側に入り込んでうねっていた細い触手が一本、少女のアクメに合わせてビクンと震えて粘液を吐き出してきた。幾本もの触手が、真似をして革輪の裏側で同じく射精をしてくる。首を生温かい精液でどろどろにされたシエリスは、総毛立った。気が狂いそうになるおぞましさと、汚される興奮。瞼の裏に、この光景を見てせせら笑う陵辱者たちの瞳を思い浮かべると、ゾクリと心が疼く。

かくんとシエリスは頭を下げた。ヒクヒクと震える尻を観衆に突き出す。右頬の半分を



粘液に漬けて、喜びとも屈辱とも判別し難い涙を流す。

(イっちゃった……まけた……)

惨めな敗北の代わりに、陵辱は終わった。それだけが救いであった。だが――。

――スリ。

「ひゃうううう！」

白く艶かしい二本の太い触手が、脱力したシェリスの足首に巻きついた。螺旋状に脚線を這い上り、胴に絡みつく。女性の内腿のような、しっとりとした感触だった。女同士で肌を重ねるような、背徳感に満ちた肌触りだ。少女の内腿を擦って恍惚感に震わせると、胴を絞り、腕に巻きついて両腕を上げさせ、無理矢理に立たせてくる。

シェリスの瑞々しい肌と妖艶な白触手とが重ね合わされた。触手共の愛撫で焼かれるように肉体が蕩けているシェリスは、それだけでもうたまらない。

「あ、くあううっ？ も、もう終わりなんじゃ……っ」

朱の抜けない顔で少女は身悶える。驚いてギルバを見ると、奴は背後に立っていた。

「なあに、これだけ粘液を垂らしていれば、軽く達した程度では誰にも分からんさ。好きだけ恥液を垂れ流すがいい」

盛大に絶頂を迎えなければ、競りは終わらない。遠回しにそう言って、シェリスの胸に太い両腕を回してきた。淫液になめされた黒革の胸部が、魔神の大きな掌中で紙細工のよ

うに容易く形を変える。小指を使って弾力的な脂肪塊が掬い上げられ、お椀型の双乳が円錐形に見えるほど激しく掴まれた。太い十本の指が革衣装を陥没させて、潰すように深々と柔肉に食い込む。すると、そこが火に炙られたように熱くなった。その熱はじんわりと乳房全体に広がり、やがてシエリスの胸で盛大に燃え盛る。

(あ……あ……敵に……？　こいつに胸を揉まれて……感じて……)

操り人形のようにカクカクと顎を震わせるシエリスは、裏切り者の乳房を見つめて呆然とした。揉みしだかれ、革裏にズチュズチュと乳肉を舐め吸われると、上気した頬を汗が伝う。乳芯から発する甘美な電流にヒクヒクと上体が震え、息が荒くなる。赤い乳首がどんどんとポリウムを増し、横倒しになって生臭いローション塗れのドレスの裏地で転がった。

——わ、私は、誰の手でも感じるような変態じゃない……何か……細工を……。

「別に何もしておらん。ただ、寄生した瞬間より、貴様の肉体のことは誰よりも熟知している。どうだ、こうされるとたまらぬなどと、今の今まで知らなかっただろう？」

——ギニュウウ、ギニュウウウ！

「ん、んんん——っ！　んああああっつ！」

杵臼でつかれる白餅の如く、縦横無尽に形状を変化させられて乳房を弄ばれる。颯られる勢いのあまり胸のカップがずれそうになり、肌との間に隙間ができる。ぬめった革裏で

ヌチヨヌチヨと擦られていたニプルが、快感の電流に撃たれたかの如く、ヌルンツと跳ねて直立した。乳輪を従えて膨らむ赤塔が、少女の汗と粘液に塗れてヌラヌラと照り輝く。

胸から毒蜜が滴るような甘い官能が広がっていく。乱暴に揉まれるたびに、乳房から身体に興奮が流し込まれていく。胸がドロドロに蕩かされていくようだ。形を変えた乳房が、そのまま溶け落ちてしまうのではないかと恐怖を覚えるほどの、愉悦だった。

「あ、ひ……！ はああ、ふあああ……。……はんうううつつ！」

「クヒヒヒヒ！ これが貴様の本性だ、シェリスエルネス！ そうら、もっと観客にアピールするがいい、なにせ、あの中の誰かが今宵の貴様のご主人様になるのだからなあ？」

パン粉を捏ねるように延々と胸を揉まれる。いつしかシェリスは、首を左右にゆらゆらと振り始めていた。最早、普段の凜とした澄まし顔など見る影もない。真つ赤に紅潮し、あどけない仕草で首を振る魔翼の姫君がそこにいた。全身に視線を感じながら、喘ぐ。

「くあ……くはあ……んくあああ！ は……あんつ、あは……っ！」

反撃の手段が見つからないまま、興奮だけが増大していく。瞳の焦点が合わなくなり、我知らず歡喜の涙が零れていった。

『責め手に揉まれるがままに形を変え、それでいて決して己の形を見失わず元の形に戻るうとする乳房！ 押せば押すだけ抗うくせに、吸いつくように甘えてきて極めて従順。普段からもしつとりと濡れ、一度愛撫を受ければ卑猥に貪欲に汗塗れっ！』

(そんな、こと、言わないで……。またイっちゃう……。もう胸揉まないでええ！)

ギルバが黒革のドレスのカップを外した。武骨な十本の指で両乳房を絞り上げ、品評された胸部をシエリスに見せつけるように、グイと上に向ける。狭窄する視界の中で、無惨に潰された乳房が蒸し上がった白饅頭のような湯気を立てていた。汗をかき真っ赤に色づく柔肉の頂点、ギチギチと押し出される乳輪の先にパンパンに張り詰めた肉の尖塔が立つ。(勃ってる、私の乳首が勃ってるうう！)

ビクビクとのたうつその先端に細い白触手が巻きついて、扱いた。

——ク、キユイツ！

「きゃひいいいいつつ！」

痛烈な痺れが胸先で弾けた。このまま胸まで破裂してしまいうようなほど、気持ちがいよいよ。ショーツからトロトロと新たな愛液が滲み出し、垂れ落ちる。それを観客に隠しめせず、触手から螺旋に拘束されたすらりとした脚線を投げ出して、シエリスはのけぞった。網タイツとガーターベルトから粘液を振り撒き、ブーツのヒールで足元を叩く。とうとう口の端から涎を垂らし、妖靡に濡れきった長髪とリボンを振り乱す。

「やあああつ、やああああつ！ ひみいいいいつつ！」

それを何度も繰り返される。会場から降り注ぐ視線が、触手と共にニプルに絡みつき、激しく扱いて、競りにかけられる少女をますます追い詰める。

一度魔神が胸を解放するとシエリスはカクンと顎を落とした。

「は、あ………つ。かはああああ………」

「見てみる」

ギルバの右手にぐいと顎を上げさせられ、顔を会場に設置された電光掲示板に向けさせられる。1と0が並んでいた。人間の金銭のことなど知らぬシエリスに、その意味は分からない。だが、自分に向けられる欲望の顕現を見せられて、興奮した心臓がドクドクと脈動するのが分かった。抵抗心が被虐の喜悦に侵蝕され、心が何かを求めて疼く。

（わたくし……いじめて……ほしい……の？　ボ、ボロボロになるまで……）

あれほど猛々しかった蒼い妖眼が掲示板に魅入られて釘づけになり、豪華な黒革ドレスを粘液に漬けられた魔姫が諦めに支配されていく。

「おやおや、ザーバツハの娘とはいえ、こんな淫乱娘に大した値はつかんか」

シエリスエルネスの目元が熱くなった。羞恥とも、怒りとも、悲しみともつかない感情が、瞳に涙を浮かべさせる。マゾヒスティックな魔性に操られて、胸中で言葉を紡ぐ。

（もつと……シエリスを見てこうふんしてください……なぶつて……）

書物で見覚えた言の一つ呟いてみるたびに、歓喜が込み上げてくる。

（だ……め……わたくし……競りにかけられてるのに……こんな、に……！）

「キヒヒヒ、このままではろくな買い手がかんぞお？　プライドがあるなら少しは値を

上げる努力をしたらどうだあ？」

「あつ、あひいいいいいッ!？」

ギルバが親指で、乳鞠が陥没するほど強く乳首を押し込んだ。胸が焼け焦げるような快感が爆発し、脇の裏で火花が散る。ぐりぐりと親指を動かしたギルバが灼熱の捏乳を再開し、会場の意識があられもなく悶える少女に集中する。

「あ、ああああ! ひんっ、ひぐんっ! うくうううんっつ!」

さらに、荒縄を数本撻り合わせたほどの太さの、岩から削り出したかのような表皮を持つ触手が一本、シエリスの無防備な股間に縦一文字に食い込んだ。秘丘にべつとりと貼りつくショーツの膨らみが割られ、こんもりとした紫の茂みを透かす上質の繊維が、ごつごつした物体で擦られる。痒いような熱を孕む女腔。もうシエリスには、そこに加えられる刺激を我慢するような気力はない。ただ妖しい興奮に捕らわれてゾクリと心を震わせる。

淫液でドロドロのショーツにくつきりと描き出された濡れた恥丘を、岩触手にグイグイと割られた。会陰部すら妖しく刺激して、激しく前後に動く。ヌルヌルの陰唇が残酷に擦られるたびに、無数の微細な刺激がますます女腔の奥を熱く疼かせた。岩の出っ張りがクリトリスの辺りを刺激した瞬間、キンという甲高い痺れが脳天まで響き、腰から力が抜ける。脚が脱力し、ブーツの踵が粘液でズルリと滑りそうになる。

「かひ……かはああああ! あんっ、きひいいいいいっつ!」



やがて食道を制圧したペニスは、胃袋に到達する。それにコツンと胃の底を叩かれた時には、シエリスはこの異常な責めにすっかり身を委ねてしまっていた。侵入を止めた男根型触手が、重量感のある竿部を曲げて、鈴口の膨らみで壁を擦ってくる。

『胃壁を擦られる気分はどうだ、シエリスエルネス！』

咽頭や食道を女洞に見立てた侵入者の胴体が動かされると、胃壁が香辛料を撒かれたが如く熱くなる。嘔吐感すら眩暈のする恍惚へと変換される。

(めちやくちやにされるめちやくちやにされるめちやくちやにされるうううつつ！)

性器と化した妊婦は身体を上下に揺さぶって続きをねだる。唾液で濡れた耳の穴の鼓膜、母乳の生成器として作り変えられていく乳腺、それらにも赤い蛸足が沈められた。魔姫の身体に根を張る触手が蠢き、甘い漣で彼女を快楽の虜にしていく。負けじと尿道や二穴に詰まった触手共も運動を始め、少女の肢体を愉悦の大波で揺らした。

「ふ、ふぐつ！ ふえぐうううつつ、んつぐ、ぐむううううつつ！」

上からも下からも犯される妊婦。喉や尿道のピストン運動で被虐に耽り、女洞も直腸も肉蛇に埋め尽くされて歓喜する。全身に絡みついた触手に肌を犯されて恍惚とした。粘液を染み込まされた濡れドレスの漆黒の生地に肢体を掬め捕られて悦楽に流される。完全に受身になった魔姫は、子宮を含めたすべての場所を媚的な振動で颯られ、心身を蕩かした。

(ふああ、凄い……っ、どこで何をされてるか分からないくらい全身が気持ちいい……)



『そういえば……貴様にはきっちりと私の精を放ってやったことがなかったな』

魔神が暗鬱な気配に喜悦を滲ませながらくつくつと笑った。巨眼がいやらしく歪み、シエリスの肉体を侵すすべての触手が脈動する。先端にある円い穴の縁が、中に詰まった液体を堰き止めるように膨らんだ。目が眩むような甘美な予感が魔姫を支配する。

(だひてだひてだひてえええつつ、わたくしをいじめてえええええつつ！)

濡れ髪をべつとりと額に貼りつけた妊婦は恍惚に喘ぐ。蕩けた瞳を媚び形に弛緩させた。その瞬間訪れた、触手共の一斉射精。少女の肉体は白濁液で塗れた。

——バヂユウウウツッ！ ドビユクツッ、ブビユルウウウウツッ！ ブヂヤアアアアツッ！

「ぐ——っ！」

体内を白濁させる、自我が吹き飛んでしまいそうな灼熱。肉椅子に座らされた少女は、口内を犯す触手に嘔みついて目を剥く。鋭く白い歯で蛸肌をブチリと嘔み切り、獣のような呻き声を腹の底から絞り出す。興奮のあまり長耳が打ち揚げられた魚の如く痙攣した。

「ぶふううううう……くふうあああああつっ！」

胃の中にドロドロと白く濁った重い体液が溜まる。空になった膀胱に新しく精液が注がれた。母乳の代わりにギルバの子種が詰まり、乳房がパンパンに張る。直腸に溶けたゼリーのような粘ついた液体が流れ込み、女洞の壁という壁、奥という奥に魔神の濃密なザーメンがへばりついていった。

「おぐ……あは……！ ひっん……ふぐうううううつつつ！」

それと同時に幾つもの肉瘤がゴシクドレスに押しつけられ、次々と先端を破裂させる。熱いゼラチン状のザーメンが爆撃をするような勢いで魔姫の装束を打ち、黒チューリップの蕾のように膨らんだ服の肩や、胸の隆起を守る漆黒の布を白濁漬けにしていく。妊婦の腹を包むゆるゆるのマタニティドレスにスペルマが伝っていき、シエリスの太腿の上に広がったスカートの上に溜まって白い池を作った。あまりに液量が多いため、生地黒い染料が流されて衣装の色が抜けてしまいそうだ。

「ひい……ひい……ふむうううう……っ」

（あ、ああ……ドレスがドロドロお……っ！）

汚汁の洗浄を受けた少女は、瞳を愉悦で濁らせた。身体の穴という穴を精で満たされて感じるのは、充足感だ。これ以上はないと言うほど精液を味わった少女は恍惚と喘いで身を振り、口から胃までを串刺しにされて断末魔のような痙攣を見せる。今までは触られた時しか感じなかった快感を、空っぽの肉体に一杯注がれて満たしてもらえたような、そんな牝犬の境地に至る。その瞬間、胸が焦げるような情動を感じた。

「くふううう、くふうううううっん！ くふうううううううつつつん！」

——ジュチュ……シュジュバツッ！

汚される昏い喜びを教え込まれた魔姫は、淫裂から潮を噴いた。腰が燃える様な熱い愉



悦を感じ、異物を呑み込んでいる口を左右に揺さぶる。拘束された身をぶると震えさせて、クリトリスの下の小穴に詰まった触手の端から、ぼたぼたと恥汁を垂らした。

(イ……イ……一杯に、されるのおお……どこも……かしこも……)

未だ胃に精を放出されている魔姫の蒼い両瞳から歡喜の涙が溢れ出し、頬に一筋ずつ川を作る。陥落の証であるそれらは、顎の所で唾液とも合流し、男根触手が詰まった魔姫の喉笛を垂れていった。肉椅子刑に処せられた囚人の妊婦は甘美な責め苦に膝を折り、胎児を孕んだ腹を触手共に撫で擦られながら、舌を使い出す。口内を制圧した肉竿に絡める。

「んむ……ふうう……あ……はあ……ふむうう……」

胃にまで繋がる裏筋を舐めて、射精絶頂の余韻に浸っていると、喉からその肉棒触手を引き抜かれた。そして、ギルバが耳元の伝声触手を喋らせてくる。

『よかったか?』

「あ、あはああ……よかった……ですうう……」

堕ちたシエリスは躊躇わず、快樂に対しての全面降伏を意味する言葉を吐く。尿道から触手を抜かれると、魔神の白濁液と魔姫の潮液が混ざって流れ出した。

「ふあ……あうう……」

一切の光明のない真つ暗な影の中に、拘束された少女の倦怠感漂う吐息と、異形の肉群が放つ熱気が満ちていく。唇からもギルバのスペルマを垂らす被虐の魔姫は、腹部や肩甲

骨、臀部といった部分を撫で回されながら、肉椅子の上で全身をぐったりさせた。

『まだだぞ……貴様が壊れるまで犯し抜いてやるからなあ……』

シエリスエルネスが休めたのも一瞬のこと。果てしない憎悪と肉欲に満ちた声で魔神が宣告し、みっちり詰まった触手共が彼女の姿勢を変えさせてきた。椅子に座っているような状態から膝を持ち上げられ、胸に押しつけさせられる。膨らんだ腹が目立つように、両脚をさらに大きく左右に開かせられた。そして、幼児が大人に背後から脚を抱えられて用足しを手伝ってもらうような、屈辱的なポーズが完成を見る。

ついで、スカートを腰の辺りからすべて破り捨てられた。視線を遮る壁が除かれたことで、白い腰の括れから太腿にかけての女性的な丸みが露わにされる。責め手の欲望が渦巻く分娩室で、肉製の分娩台に恥的な姿で乗せられてしまった妊婦は、腰を縮こまらせた。

「あ、あああ……こんな格好……っ！」

出産間近の腹を晒させられたことで、シエリスはより一層強く魔神の視線を意識してしまい、おののく。一度白い泥のプールに飛び込んだのかと思うほどザーメン塗れにされた脚部が、恥辱的な視線を浴びてふらふらと頼りなく揺れる。大きく膨らんだ腹部の影に隠れている充血しきった女性器の花弁が、白濁を吐き出しながら密やかにひくひくと震えた。シエリスの幻覚の中でギルバの巨大な瞳が、眼球が肌に触れそうに接近していた。それはゆっくと彼女の周りを旋回していく。震える長耳、精液を垂らす口、触手に撫で

擦られる横腹。肉群の中でしゃぶられている魔翼、巻きついた触手にドレスの裏で絞り出されているCカップの双乳、揉み回される臀部と齧られる悪魔尻尾。衣裳を引き裂かれて露出した腰、胎児を孕まされてぼつてりと膨らんだ腹。

「ふあう……ふあうう……っ……ひ、や……見、見るの……は……」

それが極上の愛撫である。瞳と口元を蕩けさせて、シエリスは淫らかな微笑を浮かべた。

『キキッ、キキキキキッ！ 見てやるぞお？ 貴様が妊婦の分際で『これ』に貫かれてよがる様をしつかりとなああ？』

シエリスの穴を犯した触手たちが、肌を這い回る連中を残して一度撤退する。そして、魔姫の股座の下に集って絡み合い、棍棒のような極悪な太さの肉の凶器へと姿を変えた。完成したのは赤黒い肉のタワーだ。それが二本。矢が弓に引き絞られるようにゆっくりと狙いを定めて、女腔と菊門に添えられてくる。

「あ……こ、これを……入れるの……？」

魔姫は、期待と不安の混ざった声を出した。秘部に触れてくる異形の先端。それは、新たな触手の凶悪な姿を推測させる。身体の位置を固定されていて逃げ場のないシエリスは、被虐の予感に震える。徐々に荒くなる自分の呼吸音。それを聞きながら、破裂しそうなほど心臓を脈打たせてその時を心待ちにする。

極太触手が勢いをつけるために大きく振られる気配がした。

(あ……くる……っ……太いのが……っ)

次の瞬間容赦なく肉塊の矢が放たれ、串刺し刑の如く強烈に妊婦の腹の底を抉り抜く。

——ゴズウンッ!

「イ、イひひいいいっつ!」

思わず熱い歡喜の涙が溢れ、視界が歪んだ。頸管を通して子宮内の様子すら窺えるほど開いた子宮口を深く抉られ、直腸の曲がり角も強く小突き上げられた。腰から生じた悦楽の激震が一気に全身を蕩けさせ、少女の喉から嬌声を迸らせる。悶えた彼女は引き千切られたスカートの前端を振り乱し、脳裏で弾ける桃色の爆発に翻弄された。

「ひ、ひいあつ! あ、あああああつ、ひぐうう、くつ、くはあああああつ!」

幾本もの蛸足型触手が絡まって出来ているため、棒状の肉塊は凹凸が激しい。その複雑な形状をした奇物の竿が、少女の膣と直腸とを隔てる粘膜を挟んで、二本の挿り粉木の如く体内を掻き回してきた。隆起に富んだ剛莖らが、少女の腰を荒々しく掻きぶって粘膜を押し潰してくると、悶絶するほどの快感が腰の中でスパークする。泣き顔になってよがる魔姫の子宮から背骨から脳に至るまで、駆け上がる白い電撃で痺れ上がらされる。

「あ……ひ……! ごりゆごりゆううっ、ごりゆごりゆってしてらううっ!」

みっちりとする異形の詰まった肉の底無し沼。そこに封じられた魔姫は全く動作を許されず、卑猥な子供の用足しポーズで、ただ貫かれるままにより狂わされた。大人びた涼しげな

容貌をすっかり年相応以下に弛緩させている彼女を尻目に、二本の剛莖が本格的にピストン運動を開始した。

膨らんだGスポットを特に重点的に摩擦しながら、ごつごつと、何度も女洞の奥部をノックする。大きくグラインドしたアナルの極太触手が、直腸の奥の曲がり角に、杭打ち機の如く何度も突き込まれた。

「ひゃっ、みっ、や、乱暴っ、きいい、かひんっ、はひんうっ、うあああああつっ！」

高飛車さを矯正された魔性の少女は、肉棒が突き込まれるたびに素直な反応を返し、孕み腹をたばたと揺さぶる。前用の陰莖が、わざと膣前庭の裏辺りを刺激するような角度で抜かれた瞬間、淫核が反り返るような電流を腰に流される。クリトリスをピンと勃たせたシエリスエルネスは、視界がホワイトアウトするような快感に泣き叫ぶ。

「あ、おとおおおつ、あつ、ぬ、抜くのもだめっ、ひいいきひいいいっつ！」

一度抜けた極太触手が、ブランコのように揺れて、再び女洞に押し入った。ごつごつとした赤黒い凶器が、陰唇を押し広げて、メリメリと少女の腰に突き刺さっていく。

「は、はひっ、はひいいいいいっ！ 太ひ、太すぎるのおとおおおつ！」

二本の肉棒が、ヴァギナやアナルそのものを引き摺るようにして膣壁を摩擦していく。小幅な上下運動で、モップがけをするかのようにゆっくりと力強く肉壁を擦られる。その緩慢な動きに合わせて背を丸めたシエリスは、瞳から光彩と焦点を失わせてよがり顔を作





った。魔姫は、肢体に絡んだ卑猥な肉茨にも扱かれて、めくるめく快美の世界に突き上げられようとしている。

「くひあああああつっ、イク……またイツちゃうううう……つっ！」

ギルバの剛直に刺し貫かれて、恍惚の極みにあるシエリスエルネス。

と、そんな母親を憎むかのように、胎児が蠢いた。

「ひあ、今は……いまは、動いちや、らめええ……つっ」

母体の腹の中で這い出すように動く物体に合わせて、子宮が収縮を始める。無論、赤子を外へ押し出すためだ。膨らんだマタニティドレスの腹部も、小さく上下している。

「ふあつ？ あ、ああ、出てくるううつ……赤ちゃん出てくるううつっ！」

胎児の成長速度に対応したのか、魔姫の子宮口も通常あり得ない速度で全開していく。指の先ほどに開きかけて少量の血を漏らしたものが、今ではすでにピンポン玉を通せそうなほどになっていた。

「おあ、ぎいいいつつ？ うぎううううう——つ！」

こうなれば当然母体は、陣痛を味わわされることになる。淫欲に満ちた肉の分娩室に、シエリスエルネスの絶叫が迸る。

「あがあああああああつっ！ ひぐうう、ぎぐうううああああああつっ！」

魔物の女の頑強な肉体ですら、悲鳴を上げてしまう衝撃。シエリスエルネスは腰が内側

から裏返っていくかのような痛苦にのたうち回る——筈であった。

だが、しかし——。

「ふえ？ ふええええつ？」

苦悶の涙を流していた筈の魔姫は、己の蒼い妖眼が熱く潤んでいることに気がついて、戸惑いの声を上げた。相変わらず膺の中は炎で燃やされるかのように熱く、些細なノイズを掻き消すほどの恍惚感が網膜を淫らに焼いている。それは紛れもない悦楽であった。

出産中の妊婦を二本の肉の棍棒で責め立てながら、魔神ギルバが高笑う。

『どうした、随分と顔が緩んでいるではないか！』

「なん、で……？ あ……れ……？ あ、はひ……つ……あ、れええ？」

自分をグズグズに蕩かしていく甘美な波は一向に引かない。颯られる歡喜が肢体を駆け巡り、心を埋め尽くす絶悦が、肉の痛みを軽く凌駕する。瞳に妖しく危うい光を浮かべた魔性の少女は、信じられないといった顔で、幻視させられるギルバの巨眼を見上げた。

「なん、で……？ 産んで……犯されて……、なんでこんなに凄くイひのおお……っ!？」

二穴挿入を続けられて燃え盛る肉体と、痛みすら食欲に啖って愉悦感に変えてしまふ、どこまでも渴いた被虐の魔性。その二つが、魔姫の肉も心も真つ昏な悦楽で染め上げていく。肉欲と被虐に取り込まれた彼女の瞳から正気が薄れ、狂気に憑かれた光が灯った。

「お腹、突かれるの凄くイイ……！ 痛いまで気持ちイイのおおおっつ！」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**